論文

人間社会環境研究 第30号 2015.9

77

日本語テール構文の文法化のプロセスについて
－「ガ格テール構文」から「ヲ格テール構文」へ－

人間社会環境研究科 人間社会環境学専攻

高 島 彬

要旨

これまで、日本語のテール構文では、被動作主をガ格で示す「ガ格テール構文」とヲ格で示す「ヲ
格テール構文」があり、その格標示の差異は統語的側面だけでなく、それぞれの構文の意味的側
面とも密接に関係しているとされてきた。

（1）a. 崩した古材や板が積み上げてあった。
    b. 水曜日はお休みが休みだった聞いたから、私は一日中、身を明けているのだよ。

（益岡 1987：220：下線部 筆者による）

本稿の目的は、認知言語学の観点から日本語のテール構文におけるこの二つの構文パターンを
ガ格テール構文からヲ格テール構文へと文法化する過程として捉え直し、その文法化を動機付け
る人間の認知プロセスについて考察することである。

これまでテール構文における被動作主の格標示の差異をめぐる議論には、その被動作主の格標
示の差異を受け身的文とする「一項述語文」としての考察と「自動詞文」対「他動詞文」という
「構造の差異」としての考察という大きく二つの観点に分けることができる。本稿では、概ね「構
造の差異」としての立場を取るが、二つの構文パターンを全く異なる構文として捉えるのではな
く、文法化の概念を導入することで構文間を連続的に捉え直す。

そして、この二つの構文パターンの差異を文法化の過程として位置付ける認知プロセスとし
て、Kuteva（2001）が指摘した「特定化（Specificity）」を援用する。Kutevaの提唱した「特定
化」による文法化のプロセスは、一般的な文法化のモデルとして示されている「希薄化モデル
（Bleaching Model）」とは異なり、ある言語表現に意味を追加し、特定化していくというプロセ
スである。

本稿では、テール構文の文法化のプロセスについてはこの「特定化」が関わることを述べ、テール構
文の全体像を示す。テール構文が存在表現からの文法化の過程を経て現在に至ると考えると、これま
で指摘されてきた意味内容の減少を伴う「希薄化モデル」だけでなく、その対象の存在に付随する事態を読み込み、その事態の動作主を「特定化」していくという文法化のプロセスが必要であることを示唆する。

キーワード

ガ格テール構文、ヲ格テール構文、特定化（Specificity）による文法化
The Grammaticalization of the ‘te-aru’ Construction in Japanese

TAKASHIMA Akira

Abstract

This article examines the grammaticalization of ‘te-aru’ constructions in Japanese. In Japanese, ‘te-aru’ constructions can be divided into two subtypes, exemplified in (1-2). The first type (1) is the construction where the patient is encoded by the nominative marker ga. The second type (2) is the one where the patient is encoded by the accusative marker wo.

(1) ‘X-ga te-aru’ construction

Tsukue-ni hon-ga oite-aru.

desk-Loc book-Nom put on-te-aru

(2) ‘X-wo te-aru’ construction

Boku-no heya-ni hon-wo oite-aru.

My room-Loc book-Acc put on-te-aru

Many linguists pointed out that the difference between ga and wo in the constructions affects not only the syntactic aspect but also the semantic one. There are two types of analysis of the different cases in ‘te-aru’ constructions. In the first type, the constructions are considered to be passive-like sentences (cf. Soejima 2007, Suda 2010). In the second type, constructions are considered to be causative alternations (i.e., the opposition between the intransitive construction is ‘X-ga te-aru’ and the transitive one is ‘X-wo te-aru’). I will take the latter position one step further and show that it can be analyzed as a matter of grammatical development.

In this paper, I will analyze differences in these constructional types as grammatical development from the ‘X-ga te-aru’ construction into the ‘X-wo te-aru’ construction. The framework I use to tackle this problem is “specification,” which Kuteva (2001) showed as a mechanism of semantic change in grammaticalization. I conclude that specifying the information (especially, the information of the agent in the event) led to the grammatical development of ‘te-aru’ constructions.

Keywords


1. はじめに

日本語のテアル構文には、(1a) に示すように被動作主をガ格で示す構文（以下、ガ格テアル構文）と（1b）のようにヲ格で示す構文（以下、ヲ格テアル構文）の二通りの構文パターンがあり、それらの構文パターンにおける格の交替現象は、単なる統語的操を留まらず、表現の意味にも影響を及ぼしていることが指摘されてきた（cf. 益岡 1987）。

(1) a. 崩した古材や板が積み上げてあった。
    b. 水曜日はお休みが休みだと聞いたから、私は一日中、身を明けであるのだよ。

(益岡 1987: 220: 下線部 譜者による）

これまで、なぜこれら二つの構文パターンがあるのか、または、なぜ被動作主の格の交替現象が生じるのか問題となってきたわけだが、本稿では、この二つの構文のパターンをガ格テアル構文からヲ格テアル構文へと文法化する過程として捉
2. 被動作主の格標識に関する見解

二つの文法化のプロセスについての考察

2.1「格の交替現象」としての考察

須田（2010）と副島（2007）は、以下に示すように、動作の客体の結果的な状態を表す「一項述語文」、つまり、受け身的なヴォイス構文の一変種としてテリアル構文を捉えており、被動作主がガ格標識なるかヲ格標識なるかに関しては「格の交替現象」として扱っている。

(2) [動作主 ガ 対象ヲ に スル]
ガテリアル構文 - 対象ガ に テリアル
ヲテリアル構文 - 対象ヲ に テリアル

須田（2010）は、被動作主となる対象が「ガ格」を伴うという受動態と似ている側面があることを指摘した上で、テリアル構文はもとの文（スル形）と比べると、結合価の減少を伴うため、「動詞は他動詞でありながら、文としては自動詞文に近い構文論的な構造を持つという特殊な文法的な文である」（須田 2010: 349）としているが、須田が「一項述語文」として指定しているのはガテリアル構文のみであり、ヲテリアル構文に関しては言及されていない。

副島（2007）はテリアル構文を「意志的動作の結果生じた対象＝客体の状態」を表す「客体結果相」であるアクティブの側面と動詞のスル形に対して結合価の減少を伴う「一項述語文」と的にしてのヴォイスの側面が絡み合ったアクティブ＝ヴォイス形式と規定している。副島（2007）の特徴は、ガテリアル構文とヲテリアル構文の両方を「一項述語文」として扱っていることである。すなわち、副島はガテリアル構文を「受け身型」と規定するが、その根拠として、村木（1991）が示した以下の3つの受け身ヴォイスの特性と一致することを挙げている。

(3) 1）形態的なものとして、動詞が特別な形態をとる（日本語：サルル）。

2）統語的なものとして、能動文に比べ結合価の減少をともなう、つまり、Pが必須項として主格をとり、動作主（agent, 以
下A）は斜格（日本語：二格、カラ格、あるいはニヨッテを後接）をとってオプショナルな要素となる。

3）意味的なものとして、Pに視点が置かれ、という特徴がある。

上記の定義に沿ってガグテリアル構文の特性をみていくと、①形態的な側面として、動詞が特別な形態「Vテリアル」をとり、②被動作主が主格ヘと昇格し、動作主が削除され二項語文から一項語文となる。そして、③動詞の表示動作の結果生じた状態を表している主体はガグで標示される被動作主であることから、被動作主に焦点が置かれている。以上3点から、副島はガグテリアル構文を「受け身型」と規定しているのである。

次に、ヲ格テリアル構文もガグテリアル構文と同様に、単一必須項による「一項述語文」を規定する。その根拠として、意味上の視点がヲガグで示される被動作主に置かれるため、意味的には受け身文の特徴を満たしていること、また動作主が必須項ではなくオプショナルとなり、文全体として結合値の減少を伴うことを挙げており、ヲガグテリアル構文は被動作主をヲガグ標示のまま単一必須項による「一項述語文」であるとしているのである。基本的に日本語の自動詞文では単一ヲがガグで標示するのが、ヲガグテリアル構文における単一ヲがヲガグで標示されることになる。このことに関して、副島は動作主を除して主語に被動作主を取る能格性のテリアル構文と一致していることを示し、ヲガグテリアル構文を「能格型」として規定している。

(5) a. 俺は飛行機の予約をしてある。
   b. *俺は飛行機の予約がしてある。

以上のことを考慮すると、完全に「一項述語文」と言えるのはガグテリアル構文のみであり、ヲガグテリアル構文も分析の射程に入れるためには、少なくともヲガグテリアル構文を他動的な構文として扱う必要があると考えられる。

2. 2「自動詞文」対「他動詞文」としての考察

次に、テリアル構文における二通りの構文パターン
この提え方の発端は森田（1977）であり、森田は二つの構文の主述関係が異なっていることを指摘し、「まったく異なった発想に由来する別形式の文」であるとしている。

(7a) 近代文学館にはたくさん資料が集められている。
(7b) 私は修士論文作成のためたくさん資料を集めてある。

(森田 1977: 53)

3. テリアル構文の構文パターンと「意味領域」

これまで、テリアル構文とヲテリアル構文の構造的側面を概観してきた。次に、この二つの構文の構造的差異がそれらの意味とどのような関係にあるのかについて見ていくことにする。これまで、テリアル構文には主に意志的行為の結果状態を表す広義の「存在」の用法と前もってある行為を済ませてあるという「準備」の用法があるとされ（吉川（1977））、この二つの意味が構文パターンと密接に関係していることが指摘されている。この意味と構文パターンが関連する要因として、主に二つの要因が指摘されてきた。一つ目は、動詞「アル」の存在の意味の希薄化である。益岡（1987）ではテリアル構文を4つの意味領域からなる連続体として捉えたのであるが、この連続体は存在的意味が希薄化していく過程として捉えることができる。二つ目に、動作主の性質が関与するということである。杉村（1996）では、「話し手の視点」という概念を導入し、話し手が動作主と観察者のどちらの視点をとるかによってテリアル構文の意味が異なることが指摘されている。

3.1 テリアル構文の意味領域

益岡（1987）は「テリアル表現全体を共通して認められる意味的特徴は、意志的行為の結果に重点が置かれる【結果相】の表現である」とし、「対象指向性」の最も強いA₁型と「行為指向性」の最も強いB₂型が両極を成す4つの類型の連続体としてテリアル構文を捉えている。益岡の示した類型は以下のようにまとめられる。

A₁型：広義の存在表現の一種
例）飲みかけのコーヒー茶碗が、受け皿から離れて置いてある。盆栽が幾鉢かならべてあった。

A₂型：対象に認められる、何らかの状態存続
例）新聞紙の半分ぐらいをさらに四つに切ったうらの切り抜きが折ってあった。
た。
それが、いつの間にか磨いてあるのに気づいた。

B_1型：結果の事態の存続
例）住宅は11棟で、ベッドルーム150室を確保しております。

B_2型：単に行為の結果が基準時において何らかの有効性を示す
例）それで、京都府警に鑑定をたのんでもある。

上京する時間は言ってあったのですが、……。

この連続体におけるA型とB型を区別する基準は格の交替であり、ヲ格テリアル構文をA型、ヲ格テリアル構文をB型としている。さらに、益岡は意味的観点からA型とB型のそれぞれに1型と2型という下位区分を設けている。

A_1型は、以下の例に示されるように、(1)存在動詞アルを用いた存在表現が等位接続できる点、(2)存在表現から成る問いの文に対する答えの文になりえるという特徴をもつため、益岡は「広義の存在表現の一種」としている。

(9) a. 飾り棚にはドイツ製の置物時計があり、青銅の馬と、シュールな陶器がおいてあった。
b. 部屋には松に菊をあしらった正月らしい生花が飾っており、神棚にも仏壇にもお供絵があった。

(益岡1987: 222)

(10) (問) その部屋にはどんなものがありましたか。
(答) 風景画が飾ってあり、ピアノが置いてあり、陶器が並べてありました。

( Ibid: 222-223)

このような存在表現としての特徴は見られないものをA_2型とするのだが、その基準となるのは「動詞受動形+アル」の形式がA_1型では自己に容認可能であるのに対して、A_2型ではその容認性に抵抗感を伴うというものである。

次に、B型の下位分類において基準となるのは「対象の存続の有無」である。B_1型では、行為の結果もたらされる対象の状態が基準時において引き続き存在している（「残っている荷物がホテルにある」など）が、B_2型では結果状態にある対象の存在は必要ではなく、行為の結果が基準時において有効性を持つことのみを表している。このような結果の差異の根拠として、益岡はB_2型では時の副詞の生起が許容されるが、B_1型では許容されにくいことを例に挙げている。このB_1型とB_2型との区別においても、動詞「アル」の存在の意味が希薄化していることが見て取れる。

01 a. それで、3日間に京都府警に鑑定をたのんでもある。

b. 上京する時間をその日の朝、言ってあったのですが、……。

( Ibid: 229)

02 a. ？住宅は11棟で、一年前ベッドルーム150室を確保しております。

b. ？古河健志は荷物も所持金も一切をその日の朝レイクサイドのホテルに残してあった。

( Ibid: 229)

益岡（1987）の類型は次のような図を用いてまとめることができる。益岡（1987）は結果状態にある対象に焦点を当てる「対象指向性」が最も強いA_1型と過去に行われた行為に焦点を当てる「行為指向性」が最も強いB_2型を両極とした4つの類型からなる連続体としてテリアル構文を捉えているのである。

益岡（1987）の示した類型は明らかに存在を表す動詞「アル」の意味が希薄化していくプロセスが関わっている。そのため、この類型はそれ自体
で動詞「アル」が助動詞化する文法化のプロセスであると言える。しかし、この希薄化のプロセスだけでは、存在の意味の消失に伴ってなぜ被動作主の格が交替するのかを完全に捉えることができない。本稿では、テリアル構文の文法化には動詞「アル」の存在の意味の希薄化と平行するように、（表現の中心となる）指示対象に関連する出来事が「特定化」されていくという文法化のプロセスがあると考える。

3.2 テリアル構文に表れる動作主

益岡（1987）の考察は被動作主の存在の希薄化を基準とした意味変容であると言える。テリアル構文の意味には被動作主の存在という一つの明示化されない動作主の性質が関わっていることが指摘されている。森田（1977）では、ガ格テリアル構文の動作主は素材となる第三者で、話し手や聞き手は行為者とはなりえないという、ヲ格テリアル構文では話し手が聞き手となることが多いとした。その森田の考察に対して、杉村（1996）は両構文間の動作主の制限はそれほど明瞭なものではないことを指摘し、「話し手の視点」という概念を導入し、両構造の差異を次のように示している。

(04) では、自己の行為を客観的で示しているため、動作主が話し手であるが観察者の視点を取ることができ、(05)では動作主が「うちの娘」という他者であるが、動作主が自分の領域にあり、その者の視点に立ちやすい状況であるためヲ格テリアル構文で表現できるとしている。

(04) 今改めて眺めると、私の部屋について本当に和風なのでね。床には畳が敷いてあるし、その上に和箪笥と机も置いてあるわ。それに床の間に掛軸だって掛けてあるわ。

（杉村1996：71）

(05) うちの娘は彼にネックレスをもらってあるんだ。

（ibid:71）

このように話し手の視点を導入し、言語表現の背後にいる話し手の存在を考察に含めたという点に杉村（1996）の特徴があるわけだが、話し手が動作主の視点に立つとはどういうことなのかをより具体的に示す必要がある。杉村（1996）の主張をまとめるとき、ガ格テリアル構文では、話し手は観察者の視点に立ち、不特定の第三者が行った結果状態を状況描写として表現するのに対し、ヲ格テリアル構文では、話し手が動作主の視点に立ち、特定の動作主が行った行為の現在での有効性を表現することになる。つまり、話し手にとって、描写する出来事の動作主が明確であればあるほど動作主の視点に立つことができ、ヲ格テリアル構文を用いることができると言え換えることができる。このように考えると、森田が指摘したようにヲ格テリアル構文の動作主が話し手が聞き手になることが多いというのも、発話時において動作主が明確であるためであると考えられ、また(04)の例において、動詞「もる」の動作主である
「うちの娘」が言語化されている事からも、話し手にとってその動作主が明確であることが見てとれる。したがって、話し手の視点という概念は話し手にとって動作主が明確であるかどうかということであり、その動作主の明確さによって二つの構文パターンが使い分けられているのであれば、テアル構文の構文パターンには動作主の特定化の度合いが密接に関わっていると言えるのである。この動作主の特定化は、Kuteva（2001）の「特定化」の文法化のプロセスと密接に関連している。

4. 「特定化（specification）」による文法化

文法化（Grammaticalization）とは、以下に示されるように、語彙的要素が文法的な要素へ、または文法的な要素がさらに文法的な機能を担うような意味変化として定義される。

Grammaticalization is defined as the development from lexical to grammatical forms, and from grammatical to even more grammatical forms.

(Heine and Kuteva 2007: 32)

一般的に、「文法化は瞬時に起きるものではないが、個々の言語使用者や使用者の集団の中でставитьに定着していく連続的、段階的なプロセス」であり、文法化が段階的なプロセスであるため、現在用いられている文法構造その全体も段階的な性質を有している。つまり、現代の文法構造においても、まだ語彙的意味を残している文法形式からかななり文法化が進んでいる文法形式まで段階性があると言えるのである。そのため、もしある構文や文法形式文法化の段階性が現存している場合、共時的な側面からその文法構造の文法化のプロセスを明らかにすることも可能であると言える。本稿では、この共時的な視点からのテアル構文の文法化のプロセスを考察していくことにする。

文法化における意味変化の研究においては、Bybee et al（1994）の提唱した「一般化（generalization）」やHopper and Traugott（1993）が示した「語用論的推論」などがよく知られているが、本稿で注目するのは、Kuteva（2001）が提唱した「特定化（Specification）」による文法化である。一般に、文法化は「具体／特定から抽象／一般（concrete/specific-to-abstract/generic）」へと意味変化するという「一方向性仮説（Unidirectionality hypothesis）」が有力であるが、Kuteva（2001）は、助動詞の文法化を分析する際に、「特定化」のプロセスが重要な役割を担うことがあり主張する。Kuteva（2001）の提唱する「特定化」は、いわば言語表現の意味をより限定的に、または、特定化するための情報の増加による文法化的メカニズムである。

When I talk about specification, as it relates to semantic change, what I will be referring to is the process whereby (a) specificity (ies) is (are) added to the meaning of a given linguistic expression.

(Kuteva 2001: 36)

Kuteva（2001）の「特定化」には、言語表現に現れない「非示明的（covert）」な意味の特定化だけでなく、形態統語的に示明化される「示明的（overt）」な意味の特定化の二つがあると考えている。つまり、言語による情報の交渉を行う際に、特定化する情報を示明化せずに意味的・語用論的に特定される場合と情報を特定化するためにコード化する二通りの特定化があるというのである。ここでは、この二つの特定化の両方が現れるブルガリア語の「完了の構造（perfect structure）」の文法化の例を取り、特定化の文法化のプロセスを概観することにする。ブルガリア語の完了の構造の文法化は、表1に示す5つの段階に区分される。

まず、第1段階は「XがYを所有している」という他動的な所有構文である。ブルガリア語の完了構造も、英語の完了と同様に、「持つ（iman）
表1：ブルガリア語の完了構造の文法化の段階

I. \[ X \quad has \quad Y \quad (\text{possr}) \quad (\text{poss.vb}) \quad (\text{poss.m}) \]
II. \[ X \quad has \quad Y \quad Z \quad (\text{modif}) \quad (\text{possr}) \quad (\text{poss.vb}) \quad (\text{poss.m}) \]
II'. \[ X \quad has \quad Y \quad Z \quad \ldots \quad (\text{modif}) \quad (\text{reinterpr. induc. cont}) \quad (\text{possr}) \quad (\text{poss.vb}) \quad (\text{poss.m}) \]
III. \[ X \quad has \quad Z \quad (\text{agent}) \quad (\text{aux}) \quad (\text{main verb}) \quad (\text{dir.obj}) \]
IV. \[ X \quad has \quad Z \quad (\text{agent}) \quad (\text{aux}) \quad (\text{main verb}) \]

（ibid: 40）

という語彙的動詞が出発点となっている。

08 Imam tezi lekciib. PL from my colleague
have.1SG these lectures
'I have these lectures (i.e. the materials for the lectures).'

(ibid: 40)

次に II' の段階では、分詞の動作主が明示されない場合には、「分詞で表されるイベントの動作主も文の主語と一致する（the subject is also the agent of the action in the participle.）」という「非明示的な特定化」が生じる。つまり、特別に分詞句の行為を行う動作主を明示しない場合には、「主語が動作主である」という非明示的な動作主の特定が行われるのである。

09 Imam gi napisani minalata sedmica. PL from my colleague
have.1SG them write.PART.PL last.the week
'I have them written last week/ I have written them last week.'

(ibid: 41)

この段階では、分詞によって表されるイベントの動作主が誰であるかは曖昧となる。したがって、次の例のように動作主（maja kolega）が明示化することも可能である。

10 Imam tezi lekciib napisani ot moja kolega. PL from my colleague
have.1SG these lectures write.PART.
'I have these lectures written by my colleague.'

(iiib: 40)

第三段階では、この「非明示的」な意味（文の主語である所有者と分詞の行為者が一致する）の特定化が形態統語構造に影響を与える。このとき、「Imam (=have)」が助動詞化して、分詞が主動詞とし再解釈（reinterpretation）されることで完了を示す構文となるのだが、そのプロセスに関しては、この段階での再解釈を「概念が近接している場合の類似性的原則の現れ（a manifestation of iconic principle of conceptual proximity）」で
あると述べている。つまり、助動詞で表される「所有」と分詞句で表される「行為」が概念的な近接関係にあるので、それぞれの主語が同一であるという「類似性の原則」に基づく言語表現の再解釈が行われるのである。

**Imam napisani tezi lekcii.**

Have.1SG write.PART.PL these lectures
'I have written these lectures.'

( Ibid: 41 )

最後に第四段階では、これまで所有構文として保持されてきた他動性が消失し、自動詞的表現を取ることができるようになり、目的語を取らない表現が現れる。

**Imam sgotveno.**

have.1SG cooked.PART
'I have cooked'

( Ibid: 42 )

このように助動詞の文法化のプロセスの一つとして、Kuteva (2001) は「特定化」のプロセスが重要な役割を果たしていることを示唆した。文法化のプロセスは、いわゆる「希薄化モデル (Bleaching model)」といわれる意味内容が薄まる文法化のプロセスが一般的であるが、表現される意味構造に、明示的に、または非明示的に情報を付加することで特定化していくプロセスも文法化の重要な側面を成しているのである。

Kuteva (2001) ではこの特定化がなぜ生じるのかについては述べられていないが、この「特定化」のプロセスは、対話者間での情報の交換において、話し手が聞き手に対してより詳細に指示対象を伝えたい、または聞き手が話し手の発話をより詳細に理解したいという認識プロセスを伴うものであると考えられる。というのも、ある指示対象に示的に情報を付け足したり、非示的に動作主を特定するというプロセスは、話し手が聞き手に情報を伝えるため、また聞き手が話し手の情報報の内容を復元するために必要なプロセスであり、日々の言語使用の中で常に行われている我々の認知の現れであると考えるためである。そのため、この「特定化」のプロセスは文法化のプロセスであり、人間の情報伝達における認知プロセスの現れでもあるのである。

5. テリアル構文の文法化

Kuteva (2001) が提唱した「特定化」による文法化のプロセスを観察し、テリアル構文の文法化の過程を捉えると、以下のようにになる。以降、テリアル構文の文法化の段階をそれぞれの段階ごとに見ていく。認知言語学で用いられる認知構図を用いて図式化していく。

表2: テリアル構文の文法化の段階

<table>
<thead>
<tr>
<th>構造</th>
<th>動作主の性質</th>
</tr>
</thead>
<tbody>
<tr>
<td>I. Xガアル</td>
<td>動作主 = 不特定</td>
</tr>
<tr>
<td>II. XガVテアル</td>
<td>動作主 = 話し手</td>
</tr>
<tr>
<td>III. XヲVテアル</td>
<td>助動主 = 話し手</td>
</tr>
<tr>
<td>IV. (Yハ) XヲVテアル</td>
<td>動作主 = 話し手</td>
</tr>
</tbody>
</table>

まず、テリアル構文の第一段階は「Xガアル」という存在表現である。動詞「アル」は存在を表す動詞であり、テリアル構文はこの存在表現からの拡張であると考えられる。

山の上に学校がある。

次に、第二段階では「Vテ」を明示することによって、「どのように」「存在しているのかという特定化が行われる（つまり、「明示的特定化 (overt specificity)」）」。この段階でのテリアル構文は、益田 (1987) が最も「対象指向性」の強いA1型を「広義的存在文」であると述べているように、「アル」の存在の意味を強く残しており、「Vテ」は対象の存在の様態を付け加える修飾部（Modifier）として機能している。そのため、以下の例文では「Vテ」の部分を省略したとしてもそ
の文脈は保たれる。ここで修飾部として付け加えられる事態は他動的状態であり、その事態の被動
作主と「アル」が示す存在の主体とが一致する。3

① a. テープルにリモコンが置いてある。
   b. 玄関にツリーが飾ってある。

第一段階から第二段階への過程を図示すると以下のようになる。それぞれの図において太線で示
した四角が「Xガアル」という「存在」を表している。第二段階では、指示対象の存在の背後にあ
る事態を特定する。その背景となる「X」で示される他動的状態を第二段階の図では示してある。
このとき、働きかけを行う左の丸（動作主）
の中にある三角はその動作主が不特定であることを示している。

図 2 Stage I  図 3 Stage II

ここで注意すべきは、この段階のテリアル構文で
は動作主を明示しないが言語表現の背景知識とし
て含意されるということである。このことはテイ
ル構文と比較すると明らかであり、以下に示され
る「ぶら下がっている」は自殺行為の結果と考え
る傾向が強いが、「ぶら下がってある」は他殺行為と
捉える傾向が強い。

② a. 死体がぶら下がっている
   b. 死体がぶら下げてある
   （森田 1984：135）

そして、その動作主は、基本的に「第三者のか
つて行った行為の対象（本）に視点を合わせ、そ
の状態を現在の事実として把握する現象文で
ある。」（森田 1994）や「…その処置行為の主体が
不明または不問のまま、眼前的状態をそのように
客観的に描く場合…」（寺村 1984）とされるのが
一般的であり、不特定の第三者が行った行為の結
果状態を表すとされる。しかし、第二段階には、
以下に示すように、動作主が話し手自身であると
特定化される事例が存在する。

③ [編集者の高田若手の小説家である雄太郎
に対して]
   「私が削るのではないかと思っただけ部分に鉛
   筆が入ってあります」
   「でも削るのは無理ですよ。書いた部分はど
   れも必要な部分です」
   雄太郎は抗議したが、高田はその件は取扱お
   うともしなかった。
   「夢を売る男」

この段階（II'）では、「鉛筆を入れる」という
行為の動作主は話し手（図中，⑤）として特定さ
れる。ここでの特定化は、表現上に表れない「非
明示的な特定化」であり、話し手自ら行った行
為の結果状態を聞き手に示すための表現として用
いられている。

図 4 Stage II'

この動作主が話し手であるという認識が被動作
主をヲ格で標示する再解釈（reinterpretation）を
誘発し、他動的構文を成すヲ格テリアル構文が成立
する（第三段階）このとき、動作主は基本的に話
し手であり、ある目的のためにあらかじめ行為を
行っておくという＜準備＞の意味を表している
（図 5）。

④ 「こんな・・・いいよ、誠一さんが風邪ひく」
   「すぐ前に車を停めてある。寒くないから、
来いよ」 強引に晶の手を引き、誠一がエン
トランスの自動ドアをくぐった。
   「少納言」
そして、他動的構文であるヲ格テル構文が文法構造として定着すると、言語裏に動作主を明示することが可能となり、自分だけでなく特定的な第三者をも動作主として他動詞構文の項構造として取れるようになる（図6）。これは一人称を、③では特定的な第三者を動作主として明示している。

私は二人の娘の誕生日の新聞を保存している。彼女たちが人間の世界に加わった日の具体的な状況を、口で話すより感覚できるかなと思ったからだ。

6. まとめ

本稿では、テル構文の二つの構文パターン（すなわち、ヲ格テル構文とヲ格テル構文）を文法化の過程の中に位置づけることで、被動作主の格指示の差異を説明できることを示してきた。具体的には、テル構文の文法化の出発点は存在表現であり、その対象の存在に付随する事態を読み込み、さらにその動作を行った動作主を特定していくという「特定化」による文法化のプロセスが関わっていることを主張した。

ここで、重要なことは、存在する対象から関連する出来事を読み込むという認知の在り様である。我々の認識は日常の経験に基づく様々な因果関係からなるネットワークである。そのため、実際には誰かが本を置くところを見ないにもかかわらず、「自分の前のテーブルに本がある状況を「本が置かれている」と発話することができるのはある。本稿では、このような自らが持つ知識と知覚情報とを柔軟に結びつけられる認知能力を反映しているのが存在型アスペクト形式であるテル構文であると主張したのである。"存在型アスペクト形式のテル構文の文法化には、この「特定化」のプロセスだけでなく、動詞「アル」の存在の意味が消失する過程を考慮する必要がある。つまり、テル構文の文法化には、構文の拡張としての「特定化」と存在の意味の希薄化による動詞「アル」の助動詞化の両方の側面が考えられるのであが、今後は、時刻的と共に時的データ
を基に、このテリアル構文のこの二つの文法化のプロセスがどのように相互に関連し合っているのかを含めてテリアル構文の文法化のプロセスを明らかにしていきたい。

【注】

1 ここでは、「膜かれてである」や「折られてである」、「開けられてある」、「消されてある」などの表現が容認性に抵抗感を伴う例として挙げられている。

2 テリアル構文が「存在」の意味からの拡張であることとは、適時的な出現順とも合致することが指摘されている（cf. 金木, 2006）。

3 第二段階では、存在動詞「アル」の持つ情動性制約が残っている。つまり無生物を主語に取るため、下に示すように、有情物を主語にしにくい（例：「??表に友達が待たせてある。」）。

4 我々の認識は想起しやすい事柄を優先して評価する傾向がある。このような認知の傾向は「ヒューイリストティック」と呼ばれる認知バイアスの一種であり、人間が自らの「経験則」に基づいて推論し、判断する傾向があることが指摘されている（cf. Tversky and Kahneman, 1974）。本稿での知識と知覚情報との柔軟な結びつきというのは、人間が持つこのような認知能力を反映したものである。

【参考文献】


金本敏. 2006. 「日本語存在表現の歴史」東京：ひつじ書房


益岡隆. 1987. 「命題の文法」東京：くろしお出版

森田良行. 1977. 「基礎日本語」東京：角川書店

森田良行. 1984. 「日本語の発想」東京：冬樹社

森田良行. 1994. 「動詞の意味論的文法研究」東京：明治書院

村木新次. 1991. 「日本語動詞の諸相」東京：ひつじ書房

大橋浩. 2013. 「第7章 文法化」「認知言語学 基礎から最前線へ」森雄一, 高橋英光（編）東京：くろしお出版

杉村泰. 1996. 「形式と意味の研究 – テリアル構文の2類型－」「日本語教育」Vol. 91

須田喜治. 2010. 「現代日本語のアスペクト論 形態的文法学的アスペクトと構文論的アスペクトの理論」東京：ひつじ書房

副島健. 2007. 「日本語のアスペクト体系の研究」東京：ひつじ書房

寺村秀夫. 1984. 「日本語のシナクスと意味II」東京：くろしお出版


吉川武時. 1973. 「現代日本語動詞のアスペクトの研究」「日本語動詞のアスペクト」金田一春彦（編）東京：むぎ書房

【コーパス・例文】

KOTONOHA. 「現代日本語書き言葉均衡コーパス少納言」（http://www.kotonoha.gr.jp/shonagon/）

百田尚樹. 「夢を売る男」：太田出版